虫使いのZEXAL生活

ピース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虫使いのＺＥＸＡＬ生活

【Ｎコード】

Ｎ７５６３Ｘ

【作者名】

ピース

【あらすじ】

何時の間にやら遊戯王ＺＥＸＡＬの世界に生まれ変わってしまった人のお話。

甲虫装機が魅力的でつい書きはじめてしまいました。主人公、しばらくは甲虫装機使いませんが、ご勘弁を。

拙作ながら、読んで頂ければ光栄です。

ＺＥＸＡＬの世界であるため、シンクロはしない方向で行きたいと思いますが、「使った方が良い」というご意見があれば考えたいと思います。

プレイミスがあった場合、指摘して頂けると幸いです。

二、三日に一度の頻度で更新して行きたいと思います。

プロローグ（前書き）

プロローグ、短いです。

プロローグ

輪廻転生。物語なら良いのだけれど、自分がすると呆然としてしまう。そもそも、自分が何故死んだのかも分からない。生まれ変わった時に忘れてしまったのかもしれないけれども。

成人していた男が赤ん坊になって戸惑う事を挙げれば数え切れないのだけれど、脳神経が発達していないからか、はたまた身体に精神が引っ張られているのか。定かでは無いけれど、何とか上手い事やってこれた。

これがファンタジーな世界やＳＦな世界であったなら何らかのトラブルがあったのかもしれないけれど、普通に現代。つい最近まで元々の世界で生まれ変わったものだと思っていた。

ーーそう、つい最近までは、だ。

現在三歳。生まれてから三年間気が付かなかった衝撃の事実に今、気が付いた。

『ハートランド』

現在の俺が生まれ、育っている街の名前だ。今まで気が付かなかったのは俺が間抜けだからなのだろう。あるカードゲームが異常に人気がある事で気づくべきだったのかもしれない。

『遊戯王』

俺自身生前にはよく遊んでいたカードゲーム。そのカードゲームを元に創り出されたアニメの第四作目。『Ｎｏ．』のカードを巡

る物語、『遊戯王ｚｅｘａｌ』。その舞台の名は『ハートランド』。

この世界はアニメの中の世界である、という事に対して思う所は正直特に無い。創作の世界であると言っても、俺がこの三年間気が付けなかった辺り、現実の世界と何ら変わりは無いのだから。

前世への未練もこの三年間で大分薄らいでいる。この世界の住人として生きて行く事に何ら躊躇いは無い。それに、遊戯王には前世で散々はまり込んでいた。ＡＲビジョンというリアリティに溢れるデュエルが出来るというのは非常に喜ばしい。だが、敢えて一つ言うとするならば。

「シンクロ召喚が出来ない……だと」

漫画版遊星がジャックに天荊王ブラックハイランダーを出された時のような衝撃を受けた。もっとも、この世界にはシンクロモンスター自体居ないようなのだが。

遊戯王の世界であると分かった以上、カードプールが気になる所と、親の居ぬ間にネットで調べてみたところ（三歳児がパソコンのキーボードを叩いているのは、酷くシュールであったに違いない）、シンクロモンスターは一切存在せず、チューナーモンスターは存在するものの、『チューナー』というカテゴリは無くなっていた。エクシーズ召喚がテーマとなっている作品なのだから、当然ではあるのだけれどーー

ーーこれは、参った。

前世の環境に於いてシンクロ召喚は必須であったと言って良いだろう。極一部のデッキを除いてシンクロギミックを取り入れてい

ないデッキというのは存在しなかった。当然の事ながら俺の前世で使っていたデッキもシンクロ主体のデッキが多かった。

この世界では手に入らないため悩む必要はないのだが、前世におけるデッキのレシピはあまり役に立たないだろう。デッキ構築を根本から考え直さなくてはならない。

ー先ずは、カードだな。

どのデッキを作るかはパックを買って、それから考えれば良い。

ー天道　甲谷（テンドウ コウヤ）のＺＥＸＡＬ生活、始まります。

プロローグ（後書き）

拙作ですが、よろしくお願い致します。

第一話（前書き）

初デュエル。名も無き店長と。

第一話

生まれ変わってから早四年。この世界が遊戯王の世界であると気が付いてから一年が流れた。時の流れが嫌に速いのは、幼い故であろうか。
一年前のあの日から、ちょこちょこカードを集めつつ、一応テーマの纏まったデッキを作る事が出来た。前世よりもカードのレアリティが高く、向こうで言う字レアですら一箱に一枚と言った有様。まともなデッキを組むのが酷く難しい。

そこで目を付けたのが、人気の無いカテゴリでデッキを組むという方法。はっきり言って、人気のあるドラゴン族や戦士族はいくら掛けても組める気がしない。この世界で人気が無いカテゴリは、昆虫とゾンビ。どちらの方向でデッキを組もうか考えた末、俺が選んだのは昆虫族デッキ。

初めてパックを買った時に手に入ったレアカード、『甲虫装機エクサビートル』が迷っていた俺の背を押した。

このエクサビートルは百箱に一枚あるか無いかというレアカードであるらしい。それを知った時には呆然としたものだ。この巡り合わせを無駄にすべきでは無いと俺は思ったのだ。もっともー現在組んだデッキではエクサビートルを出す事はほぼ不可能なのだが。

『キオウ殿ォ。何故私を使って下さらん！』

「いや、他の甲虫装機の集まりが悪くて」

喧しい男性の声に樹奥は溜息混じりにそう答えた。百箱に一枚

というレアカードである『甲虫装機　エクサビートル』を俺が手に入れられたのは百パーセント偶然と言うわけではない。エクサビートルが入ったパックがある店に行ったのは偶然。しかし、数あるパックからそのパックを選んだのは必然であったのだ。

ーーデュエルモンスターズの精霊。

カードショップでソイツを見た時、思わず回れ右で逃げ出しそうになった。金色に輝く機械めいた鎧。カブトムシを模した頭部に、炯炯と光る瞳。三メートルは下らない、威圧感を放つ身体。俺が逃げ出しそうになったのも無理からぬ事であると思う。

しかし、好奇心が勝り、そのまま店内へ。店員にその鎧の事を問うてみるも、そんなもの何処にあるのかと問い返される。どういう事かと首を傾げて再び鎧に目を向けると、光る瞳と視線が重なった。

『お主、私が見えるのか？』

「……見えるよ」

問いかけて来た鎧の言葉に躊躇いながら肯定を返す。

『真か！？』

「確認するまでも無く、聞こえてはいるよね。会話出来るんだから。金色の鎧が貴方なら、見えてもいるよ」

その言葉に身を乗り出して来た鎧の迫力に数歩後退りつつ、とりあえず感じるままの事実を話した。頬が引き攣っているのを明確

に感じる。

『むぅ、まだ幼い……だが……』

ブツブツと何かを呟き出した鎧を尻目に、俺はカウンターに向かう。何やらよく分からない鎧ではあるが、どうやら人を害するような存在では無いらしい。ならば、ここに来た本来の目的を果たし、この場を立ち去る事が最善であろうと思ったのだ。

俺は店員に声をかけ、パックを一つ買いたい旨を伝え、店員は背の低い俺のためにパックの入った箱を床に置いてくれた。

ーー完全に運だからなぁ。

ここで求められるのがドロー力というやつなのだろうが、自分の引き運には今一つ自信が持てない。適当にパックを選び取ろうと手を延ばしーー

『後ろから三番目を選ぶのだ。少年！』

思考の隅に追いやっていた金色の鎧から声をかけられた。ここに至ってようやく、俺は鎧がどのような存在なのか思い出す事が出来た。

ーーデュエルモンスターズの精霊。

アニメのニ作目では重要な存在で、三作目ではおまけのような要素であった存在。この事に思い至らなかったのは、この金色の鎧姿をしたモンスターに思い当たるカードが無かったからだ。

全てのカードを知っているなどと言うつもりはないが、前世において主要なカードや目立つカードは大体把握していた。この金色の鎧のモンスターは目立つ上、実に俺好みのモンスター。見逃していたと言う事はまず無い。

それ故、思考の選択肢から弾いていたのだが、この指示を聞くに、この鎧はデュエルモンスターズの精霊であるらしいと鈍い俺にも理解出来た。とはいえーー

ーー機械族っぽいんだよなぁ。

機械族は比較的人気のあるカテゴリだ。サイバー流をはじめ、乗り物の姿を模したものや、ロボットのようなモンスターなど、大人子供を問わず好んで使う者がいる。

精霊が宿ったカードがある以上、そのカードを中心としたデッキを組む事になるだろう。機械族のテーマデッキを組むのにどれ位の時間がかかる事だろうか。俺は鎧の姿をじっくりと見てーー

ーー後ろから三番目のパックを手に取った。

これが凡そ半年程前の話。エクサビートルのテキストを読んで昆虫族である事に驚きつつ、予定通り昆虫族のカードを集めていったのだ。そして現在、遂に完成したーー『スパイダー』デッキが。

このデッキに必要なカードは『甲虫装機』シリーズとは違い、モロに昆虫の姿をしている。それがどうした、と思うひとも居るであろうが、忘れてはいけない要素としてARビジョンがある。立体でリアルかつ巨大な昆虫が蠢く様は、虫が苦手な人には相当厳しいものがある。

籠の中に重なり合う程のバッタやカマキリを捕まえて回った昆虫少年であった俺（今現在も少年ではあるのだが）にはあまり関係の無い話で、ＡＲビジョンでの気持ち悪さのせいで恐ろしく人気の低い昆虫デッキは予想よりもあっさりと組む事が出来た。

ーーリアル過ぎるのが良く無いんだろうね。

ナチュル系統のようにデフォルメされているのならばまだしも、『スパイダー』に入るカードは虫の特徴を捉えてリアルに再現されるカードばかりなのだから。

『甲虫装機』系列のカードも集めてはいるのだが、人型で昆虫族というよりはどちらかと言うと戦士族、機械族に近い外見をしているせいか、昆虫族のカードにしては異常に集まりが悪い。加えて、封入率も良く無いらしく、『甲虫装機』を軸にしたデッキを組むのはまだ先になりそうだ。

「何とか二年以内に組めると良いんだけどね」

『二年……二年は長過ぎますぞコウヤ殿ォ』

「とは言ってもね」

実に暑苦しい精霊である。何せ、『スパイダー』デッキに自分を出させるギミックを無理矢理入れさせる程なのだから。シンクロ召喚があれば地底のアラクネーが使えるため幾分か出しやすいのだが、それが無いのでかなり限定した状況でなければ出す事もままならず、出したところで他の『甲虫装機』、特に『ギガマンティス』が入っていない為打点が確保出来ない。

正直、精霊が宿っていなければまず召喚しないであろう。コンボのギミック自体はデッキに悪影響のあるものでは無い上、『エクサビートル』はエクストラデッキに入るため、デッキを圧迫もしない。ただ、出す意味が無いだけで。

「よし、それじゃあデッキを回しに行こうか」

せっかく組んだデッキ、回さなければ何の意味も無い。母親に出かけてくる事を伝え、行きつけのカードショップまで走る。家から二百メートル程にあり、この店までならば一人で出かけて良い事になっている。ちなみに、『エクサビートル』と出会ったのもここだ。

「おお、坊主か。よく来たな。また昆虫族か？」

髭の濃い熊のような大男が、良く響く大声で声を掛けて来た。最初に見た時は子供の身体である事もあり、その大きさに驚いたものだが、半年も通い詰めれば慣れるというものである。

「いえ、今日はデッキが完成したのでデュエルしに来たんですよ、店長」

このカードショップの店長が、この人なのだ。因みに、初めて俺がこの店を訪れた時は留守にしていたそうだ。幸いな事だと思う。何せ、もし居たならば金の巨大な鎧と熊のような大男が同じ空間に居た事になるのだ。そうなっていたなら、確実に回れ右で店を立ち去った自信がある。

因みに、この人は見かけによらず非常に面倒見が良く、託児所

一歩手前のような事をしているため、この店には子供の姿が絶えない。俺自身面倒を見てもらう機会がかなり多い。

「ほう、どれ、俺とデュエルしてみるか？」

「……そうですね。お願いしましょうか」

ほれ、と差し出された子供用のＤパットを受け取り、腕に付けた。デッキをセットし、店長から距離を取る。店内のデュエルスペースはかなり広く、同時に三組までＡＲデュエルが可能な程だ。

「デュエルディスク、セット」

収納状態になっていたデュエルディスクが展開される。子供用でもまだ俺には重いらしく、芯に響くような衝撃が腕を伝う。

「Ｄゲイザー、セット」

左目を黄色いグラスが覆う。これが周囲の人や障害物を取り除き、リアルなデュエルモンスターズの立体像を浮かび上がらせる視覚装置だ。

ーーＡＲヴィジョン、リンク完了。

機械的な音声が、俺の鼓膜を震わせた。この世界での、初デュエル。柄にも無く、興奮を抑えきれない自分を自覚する。

『コウヤ殿、初陣だ。気張られよ！』

いつもは暑苦しい精霊の声が、今の心境には心地良い。店長が

同じ動作を終えたのを見て、戦いの火蓋を切る言葉を放つ。

「「デュエル！」」

コウヤ　　ＬＰ４０００

店長　　ＬＰ４０００

五枚のカードを引き、視線を落とす。悪くは無いが、そこまで良くも無いと言ったところか。

「先行は譲るぜ」

「ではありがたく……ドロー」

よし、良いカードを引いた。

「俺は共鳴虫を表側守備表示で召喚。そして、大樹海を発動します」

共鳴虫　　星３　　ＡＴＫ／１２００　　ＤＥＦ／１３００

青い炎を纏ったバッタが召喚され、空気を激しく振動させる。そして、共鳴虫を覆い隠すように木々が生い茂り、無数の昆虫が潜む樹海を形成する。

ーーこれでフィールド魔法じゃ無いんだから驚きだ。

この上でフィールド魔法が展開されればわけが分からない事になりそうだ。ちなみに、この世界では表側守備表示で召喚する事が可能だ。この事は『スパイダー』デッキにとって有利に働く。

共鳴虫は戦闘破壊された時、攻撃力１５００以下のモンスターを特殊召喚出来るリクルーター。大樹海は昆虫族モンスターが破壊された時、同レベルのモンスターをデッキから手札に加えられる永続魔法。

「更に、カードを一枚伏せてターンエンドです」

手堅い立ち上がりと言えるだろう。元々、ガツガツ攻めて行くデッキでは無いのだ。様子を見ながら行くべきだろう。

「なら俺のターン、ドロー。俺は怒れる類人猿を攻撃表示で召喚」

赤毛のゴリラが現れ、胸板を激しく叩く。何が癇に障るのか、頭から湯気が出るほど怒っている。

怒れる類人猿　星４　ＡＴＫ２０００　ＤＥＦ１０００

星４にして攻撃力２０００という高ステータスのモンスター。表側守備表示の場合自壊する効果と、攻撃出来る場合は攻撃しなければならない効果を持つデメリットモンスター。もっとも、デメリットになり辛い効果ではあるのだが。

このカードが出てくるという事は獣族を軸にしたデッキ。表側守備表示で出さなかったという事は、グリーン・バブーンは手札に無いのか、そもそも入っていないのか。デッキ構成にもよるが、スキルドレインが入っている可能性が有るのが怖いところだ。

「バトル、怒れる類人猿で共鳴虫を攻撃。ドラミング・アタック」

胸を叩きながら近いて来たゴリラが共鳴虫をハンマーよろしく振り上げた両の拳で叩き潰される。ぐしゃりという擬音が聞こえて来そうな程に潰された共鳴虫だが、最後の力を振り絞り、大きく空気を震わせた。

「大樹海の効果発動。星３の共鳴虫が破壊されたため、デッキより同レベルの昆虫族、共鳴虫を手札に加えます。更に、共鳴虫の効果発動。デッキより攻撃力１５００以下のモンスターを特殊召喚します。俺はデッキからスカラベの大群を守備表示で特殊召喚」

スカラベの大群　星３　ＡＴＫ／５００　ＤＥＦ／１０００

文字通りスカラベの大群が召喚される。無数のスカラベが蠢く様は、昆虫族に人気が無いのを十二分に理解するには十分な程不気味だった。ステータス面では貧弱なモンスターだが、その効果は強力。

「む、ならばカードを二枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー」

微妙。だが、使えなくも無い。

「俺はグランド・スパイダーを表側守備表示で召喚。更にスカラベの大群の効果を発動。このカードは一ターンに一度、裏守備にする事が出来る」

グランド・スパイダー　星４　ＡＴＫ／０　ＤＥＦ／１５００

くすんだ金色の蜘蛛が現れる。影は赤く、巣を張りはじめた姿は、不気味だ。個人的には嫌いでは無いのだが。

ここでグランド・スパイダーを召喚した事には意味がある。グランド・スパイダーには表側守備表示で存在する時、召喚、特殊召喚されたモンスターを守備表示にする効果がある。『スパイダー』デッキには相手が守備表示の時に真価を発揮するカードが多いため、無視はできない。

かと言ってスカラベの大群を無視すれば、返しのターンで反転召喚され、モンスターを破壊される。

スカラベの大群に攻撃し、破壊するのが正解だが、このデッキは相手を守備表示にする事で真価を発揮するカードが多い。この店に通ってデッキを作った以上、店長はこのデッキのコンセプトは理解している筈。

ーーどう動く？

「俺はカードを一枚伏せ、ターンエンドです」

「俺のターンだな、ドロー。俺は怒れる類人猿で裏守備のモンスターを攻撃。ドラミング・アタック」

「リバースカード、オープン。ライヤー・ワイヤー。墓地の共鳴虫一体を除外し、怒れる類人猿を破壊する」

発動されたトラップから伸びた蜘蛛の糸がが怒れる類人猿を絡め取り、カードの中に引きずり込まれて破壊された。

「この瞬間、怒れる類人猿が破壊されたため、ライフを１０００払い、手札からグリーン・バブーンを特殊召喚」

店長　　ＬＰ３０００

グリーン・バブーン　星７　ＡＴＫ２６００　ＤＥＦ１８００

「ですが、グランド・スパイダーの効果で……「リバースカードオープン、スキルドレインを発動」げっ」

店長　ＬＰ２０００

スキルドレインはライフを１０００ポイント払って発動する事が出来る永続罠カード。その効果はフィールド上に表側表示で存在する効果モンスターの効果を無効化するという強力なもの。

さっきの俺のターンで発動しないもんだからてっきり無いと思ってたんだが……と言うか、これを発動してからモンスターを召喚すれば良かったと思うんだが、それをしなかったって事は手札に通常召喚出来るモンスターがいないのか？

「まだバトルフェイズは終わっていないぞ。グリーン・バブーンでグランド・スパイダーに攻撃。ハンマー・クラブ・デス！」

緑の獣人が振り回す巨大な棍棒にグランド・スパイダーはあっさり破壊される。

「くっ、大樹海の効果発動。レベル４のスパイダー・スパイダーを手札に加える」

スカラベを破壊しなかったのはスキルドレインがあるからだろう。しかし、グランド・スパイダーも同様の筈だが、何故だろうか。

「俺はこれでターンエンドだ。どうした？　そんなもんか」

メインフェイズ2に入らず召喚してこなかったという事は、やはり手札に通常召喚出来るモンスターはいないようだ。店長のデッキ構成は間違いなく『スキドレバブーン』だろう。ならば、手札に有るのはイエロー・バブーン辺りか、通常魔法なのだろう。

「俺のターン、ドロー」

引いたカードは望んだものでは無い。だが、打っておく分には問題の無いカード、サイクロン。スキルドレインを破壊するのが正解なのだろうが、店長の場の伏せカードが気になる。

これだけ召喚して発動しないということは激流葬は無い。条件を満たしたモンスターを召喚していないため、奈落の落とし穴は有り得る。一度も攻撃していないため、攻撃反応型の罠である確率は高い。勿論、フリーチェーンのカードである可能性も。

「……俺はサイクロンを発動。伏せカードを破壊します」

悩んだ挙句、俺はスキルドレインではなく伏せカードを破壊する事を選んだ。破壊したカードは次元幽閉。危険なカードを処理出来た。ミラフォであれば理想的だったが、これでも十分。

ここでスキルドレインを破壊すればスカラベでグリーン・バブ

ーンを破壊できたのだが、見えない伏せカードの方が怖いと思ってしまうのは臆病の表れなのだろう。

「そして共鳴虫を表側守備表示で召喚、ターンエンド」

『スキドレバブーン』というデッキには持久力が無い。ライフ８０００の向こうならまだしも、ライフ４０００のこの世界で１０００ポイント単位でライフを払うのだから無理もない。

対して、昆虫族のデッキは大樹海の効果と優秀なリクルーターの存在によって非常にスタミナのあるデッキだ。この一山を乗り切ればどうとでもなる。

「俺のターンだ。ドロー、俺は巨大ネズミを攻撃表示で召喚」

巨大ネズミ　星４　ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／１４５０

青色の巨大なドブネズミが召喚される。白目で牙を剥く姿には可愛げのかけらも無いが、優秀なリクルーターだ。戦闘破壊された時、地属性で攻撃力１５００以下のモンスターを特殊召喚する事が出来る効果を持っている。

「バトルだ。巨大ネズミで裏守備モンスターを攻撃、丸かじり！」

スカラベがネズミにバリバリと貪られていく。中々にグロテスクな光景だ。

「続けてグリーン・バブーンで攻撃。ハンマー・クラブ・デス」

「大樹海の効果は使用せず、共鳴虫の効果のみを使用。召喚するの

はサクリファイス・スパイダー」

サクリファイス・スパイダー　星２　ＡＴＫ／３００　ＤＥＦ／５００

腹に当たる部分が電球のように透け、輝いている蜘蛛が特殊召喚される。その効果は限定的ながら、絶大なもの。

「俺はこれでターンを終了する」

「俺のターン、ドロー」

引いたカードに目を落とし、どうやらサクリファイス・スパイダーの召喚は無駄になったと笑みを浮かべる。この手に握るは、このデッキにおける切り札の一つ。

「俺はリバースカードをオープン。アヌビスの呪いを発動します。フィールド上に表側表示で存在する効果モンスターは全て守備表示になり、発動ターン、それらの効果モンスターの守備力は０になり、表示形式の変更が出来ません」

「サクリファイス・スパイダーの効果を使うつもりか！？」

サクリファイス・スパイダーには墓地に昆虫族モンスターが四体以上いる場合、このカードをリリースする事で相手フィールド上のオープン守備表示モンスターを全て破壊するという効果がある。

「いえ、俺は店長の場の表側守備表示モンスター二体を墓地に送り、現れろ。マザー・スパイダー！」

店長の場のモンスターを喰らい、俺の場に現れる刃のような足を持った巨大な蜘蛛。マゼンダ色の身体を震わせて、金切り声に似た咆哮をあげた。

マザー・スパイダー　星６　ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１２００

「なん……だと」

「自分の墓地に存在するモンスターが昆虫族のみの場合、このカードは相手フィールド上に表側守備表示で存在するモンスター２体を墓地へ送り、手札から特殊召喚する事ができます」

俺はそこで一拍置き、大きく息を吸い込んだ。この世界での初デュエルを終わらせるために。

『幕を下ろされよ、コウヤ殿』

「マザー・スパイダーで店長にダイレクトアタック。ワイヤー・スパイド」

「ぬあああああっ」

マザー・スパイダーから吐き出された糸が店長に襲いかかり、そのライフポイントを削り切った。

『完勝でしたな、コウヤ殿。流石我が使い手』

エクサが満足気に言う。実際、ライフは一ポイントも削られていないため、完勝と言って差し支えないのだがーー

「運が良かっただけだよ。初手に共鳴虫があった事、最初のドローで大樹海を引けた事、良いタイミングでマザー・スパイダーを引けた事。上出来過ぎるよ」

店長に聞こえないようにエクサに返す。実際、何かが違えばこちらの敗北も大いに有り得たデュエルだった。ただ、このデュエルで実感したが、向こうの世界に比べてライフコストが重い事この上ない。

向こうの世界では神カードであった神の警告も、こちらの世界では紙カードだ。宣告の完全下位互換カードになってしまう。また、シンクロ召喚が無いせいでデュエルの速度が落ちている上、決め手に欠くようになってしまった。

エクシーズがあるじゃない、という話だが、現状俺はランク６のモンスターエクシーズ、エクサこと『甲虫装機エクサビートル』しか持っていない。また、Ｎｏ．カードは使えない。そうなってくると使えるモンスターエクシーズの数など知れている。

「ありがとうございました、店長」

「ったく、手も足も出ねぇとはなあ。全く、お前本当に子供っぽく無いな」

まあ、実年齢二十四ですからね。身体は子供、頭脳は大人を地で行っているわけで。デッキをデュエルディスクから外し、Ｄパットの状態に戻して店長に返そうとする。

「そいつはお前にやるよ。俺に勝った褒美みたいなもんだ」

まさか負けるとはなあと頭を掻いている店長の言葉に一瞬言葉を失う。こDパッドというのはデュエルだけではなく、電話、メール、ネットなどが行える多機能ツールだ。流石に通信会社と契約されてはいないだろうが、それにしても決して安くは無い代物だ。ショップであるため安く仕入れられるのかもしれないが……

「では、ありがたく借りておきます」

これがギリギリのラインだろう。タダで貰うには高価すぎる品なのだ。後々買い取る方向で行けば良いだろう。

「ガキが気ィ使ってんじゃね～よ」

「世話になってるんですから、使わせて下さい」

俺の言葉に店長は思いっ切り渋い顔をして言う。

「本っっっっ当に子供っぽくねぇなあっ、お前は！」

「それが俺ですから」

そう言って、肩を竦める。

これは、歩き出した虫使いのお話。

第一話（後書き）

『スパイダー』デッキ、個人的には好きなんですが、フリーでも使っている人見ませんね。甲虫装機で昆虫使いは増えそうですが。

それでは、また次回に。

第二話（前書き）

原作キャラ、ようやく登場。

第二話

「全くもって、見通しが甘かったなぁ」

『二年どころか三年経っているのに組まれてないのは何故なのだぁ、コウヤ殿ぉ』

　金色の鎧姿が体育座りしている様はシュールを通り越して不気味ですらある。俺はため息一つ、『甲虫装機』収集、三年間の成果を確認する。

「まさか三年かけてモ全種一枚ずつも集まらないとはね」

『（０ｗ０）オンドゥルルラギッタンディスカー！』

　いや、モチーフは同じカブト虫だけども。最近デュエルにまるで出られないせいか、エクサの調子がおかしい。そろそろ本腰を入れてカードを集める必要があるだろう。俺自身、コカローチ・ナイトやゴキボール何ぞもう見たくも無い。

「まあ、一応策はあるよ」

『（０ｗ０）ウェイ！？』

　うん。やはりこのままだとまずいね。デュエルモンスターズの精霊がオンドゥルの王子になってしまう。暑苦しいエクサもアレなのだが、オンドゥルは最早名服し難くすらある。

「俺も小学生になったからね。大会に出られるようになった。そこ

で優勝すれば賞品のカードが手に入る。それは結構レアなカードが多いからね。売るなり、トレードに出すなりで『甲虫装機』を集める効率を上げられると思うんだ」

『おお、成る程』

ーーあ、戻った。

突然元気に（ついさっきまでも妙な方向にテンション高かったけれど）なったエクサを見るに、俺が優勝する事を疑っていないようだ。俺自身、小学生相手に負けるつもりは無い。まあ、余程の金持ちで代行天使あたりを組まれたら勝てる気がしないが。

ちなみに、俺のデッキは変わらず『スパイダー』。マイナーチェンジで『昆虫族』も作って使い分けている。もう少しカードが集まればもう一つ昆虫族テーマを組めそうなのだが、いかんせんカードが足りない。

だが、死者蘇生、リビングデットの呼び声、激流葬のような必須カードが手に入った事は大きいーーモンスターエクシーズは今だにエクサ一枚なのだが。

原作で初期遊馬のエクストラデッキにモンスターエクシーズが無かったのも頷ける話だ。七年掛けて一枚という比率はまるで笑えない。もっとも、俺の知る限り昆虫族のモンスターエクシーズは『Ｎｏ．２０　蟻岩土　ブリリアント』一枚のみ。Ｎｏ．である以上、手に入らないし、正直欲しく無い。

ーー狩らせて貰うぞ。貴様の魂ごと！

なんて奴に襲われたく無い。レダメ軸でない『銀河眼の光子龍』は怖く無いが、主要人物故のインチキドローが有り得るために余り戦いたくは無い相手だ。万が一負けようものなら魂を持って行かれるのだから笑えない。

モンスターエクシーズの中で使えると思ったのは、『グレンザウルス』と『ブラック・レイ・ランサー』。グレンザウルスはライフ４０００の世界では大きいバーン効果を持っており、元の世界で素材指定があったブラック・レイ・ランサーには素材指定が無い。

ブラック・レイ・ランサーについては驚いたが、よくよく考えればアニメでシャークさんがスカル・クラーケンを使って出していた事を思えば当然なのだろう。何故か獣戦士族なのは相変わらずだが。

まあ、無い物ねだりしても仕方がない。そもそも、マザー・スパイダーを使う関係で種族統一デッキにせざるを得ないのだ。種族の異なるモンスターエクシーズとはシナジーが無い。

『インヴェルズ・ローチ』が昆虫族なら良かったのだが、悪魔族。見た目昆虫っぽいから手に入ったら投入も考えるけれども。

『して、コウヤ殿。大会はいつあるのだ？』

エクサの問いに俺は小さく笑い、Ｄパットを腕にセットして立ち上がる。店長から借り受けたＤパットはまだ少し大きいものの、三年前に比べればずっと腕に馴染んでいた。

「大会がいつかって？……今日だよ」

『（０ｗ０）ウェイ！？』

やっぱりエクサはダメかもしれないなぁ。

デュエルモンスターズ大会小学生の部。トーナメント制の戦いで、参加人数は百人前後。多いと思うかもしれないが、これは地区レベルの大会で先にも繋がらないため、この世界では非常に小規模なものである。

正直、甘く見ていた。この世界での遊戯王の人気、というより重要性であろうか。この世界に遊戯王のプロリーグがあるという理由は理解していた。ＡＲヴィジョンによる迫力満点のデュエルは人気が出て当然であると思っていたから。

だがこの世界、というか遊戯王の世界におけるデュエルモンスターズの重要性はとどまる事を知らない。何せ５Ｄ'ｓでは警察の逮捕手段や、街一つを吹き飛ばしかねないエネルギー機関の制御装置のキーに使われていたのだから。

この参加人数を見るに、この世界でもデュエルの重要性は変わらないらしい。ＡブロックとＢブロックに分かれており、俺はＡブロックの二グループ目。比較的早いのだろう。一グループ目にとっとと終わらせた方が楽だったのだが、これぱかりは文句を言っても仕方ない。

ーーだがなぁ。

俺はデュエルが好きだ。それ故、デュエルする事自体を面倒に感じる事はない。だが、例外というやつはある。一つは、命のかかった遊戯王お馴染みの『闇のゲーム』。もう一つはーー

「勝ちの決まったデュエルはやる気が出ないんだがなぁ」

目の前で行われているデュエルを見て心底そう思う。レオ・ウィザードがアドバンス召喚されるのを見る事になろうとは。リクルーターで出せよ、という話だ。昆虫族デッキと思わしきデッキを使う少年はコカローチ・ナイトで自分をドローロックしていた。

「生贄には困らないって話じゃないぞ」

『弱者をいたぶるのは好ましく無いのだがなぁ』

まともなデッキを使っている人も居るのだが、全体の一割程度だろうか。優勝が目的とはいえ、ギリギリのデュエルがしたいと思うのは贅沢な話なのだろう。

「おっ、Aグループのデュエルが全て終わったな」

『栄光のロードの始まりだな』

優勝出来るか分からないけれども。まあ、それを目指して頑張るとしますかね。

ーーClock Up　時は加速する。

現在、Ａブロック決勝戦。ここに至るまでにデュエルしてきた相手はデッキというより紙束に近い構成であったため、何の波乱もなくビートして終了。強いて言えば昆虫のリアルなＡＲヴィジョンに対戦相手が泣き出すハプニングがあったくらいか。

そして次の相手なのだが、これは強敵確定である。Ｂブロックの方は分からないが、このＡブロックにおいて俺が唯一勝てないかもしれないと思った相手。

「いや全く、嬉しいやら悲しいやら」

『強者との戦いがデュエリストとしての本懐であろう。コウヤ殿』

「勿論。俺にとっては僥倖だよ。ただ、お前にとっては優勝の妨げにしかならないだろうと思ってさ」

エクサにとっては俺が優勝する事こそが最も都合がいい筈。俺にとっても同じだが、俺はデュエルの内容自体にも重きを置いている。

『私を侮って下さるなよ、コウヤ殿。私を使って貰いたいという思いこそ強いが、私とてデュエルモンスターズの精霊。互いの死力を尽くすデュエルは望む所なのだ。それにーー』

ーー私はコウヤ殿が負けるとは思っておらんよ。

表情こそ分からないものの、そう言ったエクサの声は笑っているような気がした。　俺は苦笑いを浮かべる。成る程俺はエクサをどこか侮っていたのかもしれないな、と。それにしても買い被って

くれる。俺の実力など知れているというのに。だが、信用してくれているのだ。

「勝つさ。俺は」

格好をつけて言ってみる。しかしーー

ーー良い事言うのにオンドゥルだもんなぁ。コイツは。

そう思ってしまった俺は責められるべきなのだろう。多分。

多くの視線と歓声を受けながら、俺はデュエルフィールドの中央に向かう。同じように反対側から歩いてくるのは、おそらく同じ年頃であろう少年。青紫色の髪はどことなくタコを思わせる奇妙な髪型。

彼の名は、神代凌牙。原作世界におけるメインキャラクターの一人にして、主人公のライバル。遊戯王にしては珍しい事に、主人公に一切の抵抗を許さず完勝した男である。前世では本名がまるで呼ばれずシャークさんとして親しまれていた、ＺＥＸＡＬきっての人気キャラクター。

使用するデッキは水属性を中心としたデッキで、構成こそ異なれ、現在も水属性中心のテーマデッキだ。そしてそのデッキはライフ４０００のこの世界では厄介極まりないもの。正直原作の構成よりも強いんじゃないかと思った程だ。

「よろしく」

「……ああ」

俺が差し出した手を言葉少なに握り返す凌牙。瞳には鋭く戦意の色が光り、愛称の通り鮫が獲物を狙い定めたかのような猛々しさを身体から滲ませていた。

お互い挨交わし、中央からデュエルフィールドの両端まで移動して、俺はデッキをデュエルディスクにセットした。

「ディスク、セット」

機械的な音を出して展開されるデュエルディスク。続けてDゲイザーを取り出して左目に装着する。

「Dゲイザー、セット」

ーーARヴィジョン、リンク完了。

Dゲイザーが輝き、幻想のフィールドが形成された。お互い五枚の手札を引き、身構える。

「「デュエル」」

コウヤ　LP4000

凌牙　LP　4000

「先攻は貰うぞ。俺のターン、ドロー」

先攻はシャークさんこと凌牙。キーカードが手札に入っていないとありがたいのだが……

「俺は手札からフィールド魔法『伝説の都　アトランティス』を発動する。アトランティスのカード名は「海」として扱う。このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する全ての水属性モンスターの攻撃力・守備力は２００ポイントアップし、手札とフィールド上の水属性モンスターのレベルは１つ下がる」

周囲が海中に佇む古代の都市に塗り替えられていく。そう、シャークさんのデッキは『アトランティス』。

「そして、俺は『水陸両用バグロス　Ｍｋ－３』を召喚。カードを一枚セットしてターンエンドだ」

水陸両用バグロス　Ｍｋ－３　星３　ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／１５００

アトランティスによりレベルが下がり、攻守の上昇した小型の潜水艇のようなモンスターが現れる。このモンスターは『海』がある時に強力な効果を発揮するカード。ライフ４０００の環境下ではインチキ臭いほど厄介なカードだ。

「俺のターン、ドロー」

手札は、悪くない。引いたカードも含めて安定した立ち上がりが出来るだろうー本来ならば。正直、魔法・罠を除去出来るカードが来なかったのはまずい。返しのターンでワンターンキルを決められてもおかしくないのだ。あのデッキは。

「俺は大樹海を発動。共鳴虫を攻撃表示で召喚。バトルだ、共鳴虫でバグロスに攻撃。ハウリング・セクト」

共鳴虫　星３　ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／１３００

「攻撃力の低いモンスターで攻撃だとっ」

海の中の大樹海ーー本当に奇妙な光景だーーから飛び出した共鳴虫がバグロスに突っ込んで自滅する。哀れ。流石はどの昆虫族デッキでも過労死確定のモンスターである。

「大樹海の効果を発動　。ナチュル・バタフライを手札に加える。更に共鳴虫の効果によりデッキから共鳴虫を特殊召喚。続けてバトル、共鳴虫で攻撃」

再び破壊される共鳴虫。だが、まだ続く。

「再び大樹海の効果でナチュル・バタフライを手札に加え、共鳴虫の効果で共鳴虫を特殊召喚。共鳴虫でバグロスを攻撃」

三度破壊される共鳴虫。過労死の面目躍如である。

「共鳴虫の効果でナチュル・バタフライを守備表示で特殊召喚」

ナチュル・バタフライ　星３　ＡＴＫ／５００　ＤＥＦ／１２００

デフォルメされた蝶型のモンスターが現れる。このカードは、シャークさん対策に入れたカードであり、このカードのせいでスパ

イダー系のカードが何枚か抜かれていたりする。

コウヤ　　ＬＰ２５００

三度の自爆特攻で三分の一以上削られたライフ。『アトランティス』相手にライフを失うのはかなり危険なのだが、虎穴に入らずば、である。

「お前……馬鹿にしているのか？」

どうやら三度の自爆特攻はシャークさんの神経をえらく逆撫でしたらしい。昆虫の基本戦術の一つなので仕方ないのだが。それに、この自爆特攻は俺にとっても賭けである。バグロスだけでも面倒極まりないのだが、恐らく攻撃にも召喚にも反応しなかった伏せカードは、十中八九『超重力の網　グラヴィティ・バインド』。

レベル４以上のモンスターの攻撃を許さない優秀なロックカードであり、エクシーズによって抜けられるとは言え、俺の持つエクシーズモンスターはランク６の『甲虫装機エクサビートル』のみ。早々出せるものではない上、打点が低すぎる。

その上、シャークさんのエクストラデッキにはアニメ効果の『あのカード』がある。バグロスの効果を考えると、俺のライフは風前の灯火だ。

「俺はカードを一枚伏せ、ターンエンド」

「ふざけやがって。俺のターン、ドロー。俺はマーメイド・ナイトを召喚」

マーメイド・ナイト　星３　ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／９００

サーベルを持った美しい人魚が召喚される。このモンスターの効果は『海』が存在する場合二回攻撃が可能となるモンスター。こいつは流石に不味い。

「罠発動、ライヤー・ワイヤー。墓地の共鳴虫を除外してマーメイド・ナイトを破壊する」

発動された罠カードから伸びた蜘蛛の糸が人魚の騎士を絡め取っていく様子はどこかいやらしさを感じる。それにしても、墓地ですら働かされる共鳴虫さんマジハンパないっす。

「ッチ、ならバトルフェイズに移行。バグロスでプレイヤーにダイレクトアタックだ」

そう、このバグロスというモンスターには『海』が存在する時ダイレクトアタックが出来る効果がある。ライフ４０００でこの効果は厳しい。

「ナチュル・バタフライの効果を発動。デッキトップのカードを墓地に送り、攻撃を無効化する」

俺の後ろに回りこんでいたバグロスから放たれたミサイルを、ナチュル・バタフライが撒き散らした鱗粉が誘爆させ、攻撃を防いだ。

墓地に送られたカードは『スパイダー・スパイダー』。モンスターカードであるというだけで僥倖だ。

「焦るなよ。まだデュエルは始まったばかりだぜ」

余裕ぶってみる。実際一杯一杯なわけだけれども。実際、シャークの手札の中に『死者蘇生』があれば負けていたし。そういう事故を無くすために攻撃を止める『ナチュル・バタフライ』ではなくバトルフェイズ自体を終了させる『ナチュル・スティングバグ』を出したかったのだが、生憎手に入っていない。

「ターン、エンドだ」

ギラギラとした瞳で睨みつけてくるシャークさん。子供ながらにデュエリストの風格を漂わせてるね、全く。さてこのデュエル、どう転ぶことやら。

第二話（後書き）

続きます。

シャークさんのデッキは『アトランティス』です。ライフ４０００なので、ダイレクトアタックとバーン効果が強く感じますね。

第三話（前書き）

決着です。

第三話

「俺のターン、ドロー」

このカードは……無駄だろうけど、一応やっておくか。抑止力にはなるだろうし。

「俺は墓地の共鳴虫二体をゲームから除外し、現れろ！『デビルドーザー』」

デビルドーザー　星８　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２６００

地面を突き破って現れるピンク色の巨大なムカデに似た虫。会場の所々から悲鳴が上がる。分からないでは無い。数いる昆虫族の中でもかなり醜悪な部類に入る姿であるし。無数の脚が蠢く様はいかにも昆虫然としているため、苦手な人にはたまったものではないだろう。

シャークもたじろいでいる。まあ、かなり生理的嫌悪感を煽るフォルムだからなぁ。

『私もあまり好かんな』

お前は昆虫族のお仲間だろうに。それで良いのか、エクサ。

「最上級モンスターをリリース無しに召喚だと！？」

墓地アドバンテージは失うけどね。もっとも、墓地の肥えや

すい昆虫族ならそんなに気にもならない。昆虫族の切り札の一つだろう。２８００という打点も中々に高いし、奇襲性も大きい。

「バトルだ。デビルドーザーでバグロスを攻撃。ドゥーム・ドーズ」

「罠発動、『グラヴィティ・バインド―超重力の網　―』」

口から何かを吐き出そうとしたデビルドーザーが緑色の網に捉えられて地面に縫い付けられる。逃れようともがく様子はお世辞にも気持ちの良いものではない。

あの伏せカードはやはりグラヴィティ・バインドだったか。厄介な。一ターンでも早く除去を引かないとマズイな。もっとも、手札のナチュル・バタフライを召喚すれば一ターンに二度の攻撃を止められる。『あのカード』対策もあるし、これは長期戦になるかな。

「ナチュル・バタフライを攻撃表示で召喚。カードを二枚伏せ、ターンエンド」

万全だとは言い難いが、伏せカードも含め、かなり整ったフィールドだ。早々突破されることは有るまい。どう崩してくる？

「俺のターン、ドロー。俺は二体目のバグロスを召喚。アトランティスの効果でレベルが一つ下がるため、レベル３のモンスターが二体！」

エクシーズ召喚の条件を満たしたな。この状況で呼ぶのは間違いなくシャークのデッキにおける切込隊長。ＯＣＧで恐ろしく弱体化したあのカード。だが……

「俺は二体のモンスターをオーバー「リバースカード、オープン。『妖怪のいたずら』」何！」

罠カード、『妖怪のいたずら』はこのターン、フィールド上表側表示で存在するモンスターのレベルをエンドフェイズまで二つ下げる効果を持つ。

「このカードの効果によりバグロス二体のレベルは一になる」

ランク1のモンスターエクシーズは存在するが、総じて三体の素材が必要になる。このターンでのエクシーズ召喚は不可能だろう。この効果はエンドフェイズまでであるため、当然次のターンにあのカードー『潜航母艦　エアロ・シャーク』を呼ばれる可能性は有るが、今はターンを稼ぎたい。

「ぐ、ターンエンドだ」

攻撃してこなかったのはまだシャークが冷静な証拠だろう。攻撃した所でナチュル・バタフライに止められ、効果で墓地を肥やされてしまうのだから。

「なら、俺のターン、ドロー」

除去は引けなかったか。それなりに入っているから引けても良いと思うのだが、中々上手くいくものではない。

「俺は三体目のナチュル・バタフライを攻撃表示で召喚。二体目のナチュル・バタフライを守備表示に変更し、ターンを終了する」

これで三回攻撃を止められるな。向こうも全体除去が来ない限り攻勢には出られないだろう。それに、自分から打てる全体除去は多くない。シャークのデッキに入っているのは『ブラックホール』や『ライトニング・ボルテックス』位だろう。『ブラック・ローズ・ドラゴン』の心配をしなくて良いのは本当にありがたいと思う。

……何か引っかかるな。全体除去。まあ、伏せもあるし、何かしらあったとしても凌ぎ切れるだろう。

「っく、俺のターン、ドロー。俺はバグロス二体をオーバー「悪いな。墓地の『妖怪のいたずら』の効果を発動」墓地から罠だとぉ！？」

妖怪のいたずらには墓地から発動出来るもう一つの効果があり、その効果がフィールドに表側表示で存在するモンスターを指定し、そのモンスターのレベルを一つ下げるというもの。エクシーズメタとして有能な一枚であると言えるだろう。

この状況でアニメ効果のエアロ・シャークを呼ばれるのはマズイ。何も出来ずにバーンで焼き尽くされるかもしれないのだから。

「だが、まだ俺は通常召喚を行っていない。俺はバグロス一体をリリース」

シャークが頬に牙を剥くような笑みを刻んだ。墓地から罠を食らわされた後にこの表情。この状況を完全に打開出来るカードと見て間違いないだろう。だが、生贄一体でこの状況をだは出来るとなると、帝系のカードだろうか？　早々手に入るカードでは無いはずだが。

「海竜ーダイダロスをアドバンス召喚！」

海竜ーダイダロス　星６　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１７００

甲殻を身に付けた竜が舞うように現れた。ドラゴンと言うよりは東洋の竜に似た姿。海竜族の名にふさわしい威容である。

ーーこいつが居たか。

というか、何故こいつの存在に思い至らなかったのかと。『アトランティス』デッキには必須のモンスターだろうに。勝手にロウビート型だと思っていたからか？　ロウビートにも入るカードだから、何の理由にもなりはしないんだが。とにかく、こいつの効果はマズイ。

「ダイダロスの効果を発動。フィールド上に存在する『海』を墓地に送ることでこのカード以外のカードを全て破壊する！押し流せ、ダイダルウェーブ」

ダイダロスが生み出した渦が海中都市を飲み込み、渦の中心となったダイダロス以外のカードを全て飲み込んでいく。空っぽになる俺のフィールド。

「止ぉめだぁ。ダイダロスでダイレクトアタック」

戦いに終止符を打つはずの一撃は、しかし放たれない。

「どうした？　何故攻撃出来ない！？」

焦ったように叫ぶシャーク。当然だろう。勝利を確信していたのだろうから。実際、首を掻き切られる寸前まで追い詰められたしね。

「お前のダイダロスが召喚された瞬間、俺はこいつを発動していたんだよ」

その言葉に表示される『アヌビスの呪い』のカード。前のターンで使ってバグロスを落とすことも考えたのだが、ライフに余裕が無い以上、防御系のカードは温存しておきたかった。

このカードの効果により、ダイダロスは守備表示となって俺は難を逃れたわけだ。しかし、このデッキがスパイダーデッキを改変した『昆虫族』で助かった。普通ならこのカードは入っていなかっただろうし。

「しぶとい奴だ。俺はこれでターンを終了する」

さて、難を逃れたと言っても楽観視は出来ない。アトランティスが破壊されたことでダイダロスの攻守は２００ポイントダウンし、元々の値に戻っているが、それでも最上級モンスター。その攻撃力は馬鹿に出来ない。

「俺のターン、ドロー」

よし、良いカードを引いた。

「手札から死者蘇生を発動。墓地からナチュル・バタフライを守備表示で特殊召喚。更にナチュル・バタフライをリリース。来い、『ミレニアム・スコーピオン』」

ミレニアム・スコーピオン　ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１８００

黒く、巨大なサソリが召喚される。口に当たる部分に人間のような口があったりとこれまた中々に不気味なモンスターである。

「ミレニアム・スコーピオンでダイダロスに攻撃」

ダイダロスの胴を鋏で締め付け、苦しむダイダロスを尻尾の針で突き刺し、破壊した。

「この瞬間、ミレニアム・スコーピオンの効果発動。戦闘によってモンスターを破壊し、墓地に送った事で攻撃力が５００ポイントアップ」

ミレニアム・スコーピオンの身体が赤いオーラを纏い、攻撃力が５００ポイント上昇する。攻撃力２５００。早々突破出来る値ではない。

「ターンエンドだ」

こちらが失ったアドバンテージも小さいものではないが、向こうはそれ以上だ。勝負をかけてきた以上後に続く手は無い可能性が高い。アトランティスを失った事も大きい。ミレニアム・スコーピオンを除去出来なければこのままなし崩し的にゲームエンドまで持っていけるだろう。

「俺のターン、ドロー。ッチ、モンスターをセットし、ターンエンドだ」

シャークはそのままターンを終了した。どうやら有効な手を引けなかったらしい。これは流れが来ているようだ。ここで一気に畳み掛けるべきだろう。

「俺のターン、ドロー。俺はクロスソード・ハンターを召喚」

強靭な二対の鋏を持ったクワガタが召喚される。

クロスソード・ハンター　星４　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１２００

「バトル。ミレニアム・スコーピオンでセットモンスターを攻撃」

セットされていたモンスターはキラー・ラブカ。鋏に断ち切られ、あっけなく消えていく。

凌牙　ＬＰ３０００

「馬鹿なっ、何故守備表示モンスターが攻撃されてダメージを受ける！？」

「クロスソード・ハンターはこのモンスターの他に自分フィールド上に昆虫族が存在する時、昆虫族に貫通効果を与えるんだ。そしてミレニアム・スコーピオンの効果で攻撃力が５００ポイントアップ」

これで攻撃力３０００。この世界のデュエルモンスターズにおいて攻撃力３０００を超えるということは大きな意義がある。前世では大したことではないのだが、有名なモンスターである『青眼の白龍』と同等の攻撃力というのは相手に与えるプレッシャーが違

う。それを抜きにしても３０００を殴り倒すのは簡単な事ではない。

「更に、クロスソード・ハンターでダイレクトアタック！」

「ぐあぁぁ！」

凌牙　　ＬＰ１２００

さて、念のためにこのカードを伏せておくとするか。断然有利ではあるものの、油断しようものなら一気に持っていかれかねないからな。

「カードを一枚伏せ、ターンエンド」

シャークは追い詰められたような顔をしている。実際、ここからのリカバリーは中々に厳しい。シンクロ召喚があればまだしも、現状のエクシーズでは力不足が否めない。

「俺の、ターン！」

鞘から剣を引き抜くようにカードを引シャーク。海馬がデッキからカードの剣を抜け、と言っていたが、成る程ふさわしい言葉であろう。デュエルディスクが盾かどうかは微妙な所だが。

「俺は『ドリル・バーニカル』を召喚。更に『シャーク・サッカー』を特殊召喚」

ドリル・バーニカル　　ＡＴＫ／３００　ＤＥＦ／０

シャーク・サッカー　　ＡＴＫ／２００　ＤＥＦ１０

００

シャーク・サッカーは自分フィールド上に魚族・海竜族・水族モンスターが召喚・特殊召喚された時、手札から特殊召喚する事ができるモンスターだ。シンクロ召喚には使えないというデメリットが存在するが、この世界では関係のない事。

ドリル・バーニカルはダイレクトアタックが可能なモンスターで、ダイレクトアタックが成功する度に攻撃力を１０００ポイント上昇させるモンスター。しかし、レベル３が二体。エアロ・シャークが来るか？

「俺は『アクア・ジェット』をドリル・バーニカルを対象に発動！」

ー出た、シャークさんのマジックコンボだ！

原作で恐らく最も有名になった台詞だ。最近薄れてきた原作知識でも容易にシーンごと思い出す事が出来る。

ちなみに、アクア・ジェットは魚族・海竜族・水族のモンスター一体の攻撃力を１０００ポイントアップする通常魔法。正直、デーモンの斧で良いんじゃ無いかと思うのだが、サイクロンや砂塵の大竜巻で妨害され無いのは一応メリットにはなるか。

「ドリル・バーニカルでプレイヤーにダイレクトアタック。ドリルアタック！」

「ぐっ」

コウヤ　　ＬＰ１２００

危ない所だ。これでシャークの手札が三枚あったら終わっていたな。だが、シャークの手札は一枚。削り切られない。

「メインフェイズ２に以降。レベル３のドリル・バーニカルとシャーク・サッカーをオーバーレイ。現れろ、『潜航母艦　　エアロ・シャーク』」

地面を突き破って現れる二匹の鮫を連結したようなモンスター。ＯＣＧで信じられない程弱体化した可哀想なモンスター。しかし、この世界での効果は強力の一言。

潜航母艦　エアロ・シャーク　　ＡＴＫ／１９００　ＤＥＦ／１０００

「エアロ・シャークのオーバーレイユニットを一つ取り除き、効果を発動。俺の手札一枚につき４００ポイントのダメージを与える」

エアロ・シャークから放たれた魚雷が俺に迫り、爆発した。

「っ、効くなぁ」

コウヤ　　ＬＰ８００

だが、生き残った。このデュエル、貰ったぞ。

「俺はカードを一枚伏せ、ターンエンドだ」

「俺のターン」

引いたカードは『一族の結束』。墓地に単一の種族しかいない場合、フィールド上に存在するその種族のモンスターの攻撃力を８００ポイント上昇させるパワーカードだ。

ここでこれを引けたのはありがたい。手札には二体目のミレニアム・スコーピオンがいたが、シャークの場の伏せカードが召喚反応型である可能性があるため、出来る事なら召喚はしたくない。あのカードがミラーフォースである場合、非常にマズイが、召喚権を残しておけば攻撃を止められるナチュル・バタフライを召喚出来る。

サイクロンがきてくれる事が最善だったが、次善のカードであると言えるだろう。保険として伏せカードもあることだし。

「俺は一族の結束を発動。バトル、クロスソード・ハンターでエアロ・シャークを攻撃」

恐らくキラー・ラブカの効果で攻撃を止めてくるか、或いはあの伏せカードの効果を使ってくるだろう。さて、どう出る？

「罠発動！　『破壊指輪』」

ーーは、破壊指輪、だと？

自分フィールド上表側表示のモンスターを破壊し、お互いに１０００ポイントのダメージを与える罠カード。何でそんな限定的なカードを入れてるんだよ、おい。ディストラクト・ポーションの方が裏守備も破壊出来る分使い勝手は良いだろうに。

自分のモンスターを破壊してお互いに１０００ポイントのダメージは正直割に合わないって言ってる場合でも無いな。

「これで終わりだァ！」

シャークのライフは１２００、俺のライフは８００。これが通れば終わりだが、ライフ４０００しか無いこの世界、俺とて対策の一つや二つ用意はしているのだ。

「それはどうかな？　　破壊指輪にチェーンし、『神秘の中華鍋』を発動」

クロスソード・ハンターが伏せカードから現れた巨大な中華鍋に吸い込まれ、消えていく。

コウヤ　　ＬＰ３４００

『神秘の中華鍋』は自分フィールド上表側表示のモンスター一体を選択し、リリースする。そのモンスターの攻撃力か守備力を選択し、その数値分ライフポイントを回復させるカード。この場合、一族の結束によって攻撃力が２６００にアップしていたクロスソード・ハンターを選択し、その数値分のライフを回復したわけだ。

次いで破壊指輪の爆風が両プレイヤーに襲いかかる。

コウヤ　　ＬＰ２４００

凌牙　　ＬＰ　２００

どちらのプレイヤーも生き残るが、俺にはミレニアム・スコ

ーピオンの攻撃が残っている。

「俺のの負け、か」

「ああ、俺の勝ちだ」

シャークの言葉にそう返し、俺はデュエルを終わらせる攻撃宣言を行った。

第三話（後書き）

今回のデッキは比較的スタンダードに近い『昆虫族』でした。スパイダーデッキベースなのでアヌビスの呪いとかが入っていましたが、基本的には。

昆虫族を色々使って行きたいのですが、シンクロ無しの昆虫軸ナチュルってデッキとして成立するでしょうか？

第四話（前書き）

デュエル無しの回。原作主人公の登場です。

第四話

あの大会からまた時は流れ、現在九歳。あの大会は結局俺が優勝した。Bブロックの優勝者は凌牙の半分以下の強さだったように思う。ちなみに、シャークこと凌牙とは学校こそ違うものの、大会で何度も会っていたこともあり、友人関係を築いている。

凌牙とのデュエルの勝率はおよそ六割程。結構な数の大会に出ているのだが、今の所公式で敗れた相手は凌牙のみである。というか、大会以外でデュエルした後にお互いにデッキを検討し合ったため、デュエルする度に凌牙が強くなっていくのを感じている。

『超古深海王　シーラカンス』とか『フィッシャーチャージ』とか使ってくるものだから、厄介極まりない。シーラカンスからレベル3の魚を四体呼ばれ、エクシーズエアロ・シャーク二体。効果発動でバーン。戦闘破壊しようにも墓地に落としたオーバーレイユニットはキラーラブカとか本当に笑えない。

原作の中で凌牙がカイトに完敗していたが、もしこの凌牙を無傷で倒せるような相手ならば、俺は絶対に勝てない自信がある。

さて、『甲虫装機』デッキ制作状況なのだが、およそ八割と言った所だろうか。大会で手に入ったカードを売ったりトレードに出したりで集める効率は上がったのだが、未だに足りないパーツがある。

大会で手に入るカードが構築に直結するカードでは無い所も収集の効率を今一つにしているのだろう。大会で手に入ったカードの中でデッキに有用なカードは主に魔法・罠カードだ。

『聖なるバリア　ミラーフォース』が手に入った事で、全デッキの安心感が上がった。流石前世の九割方のデッキに入っていただけはある。『神の宣告』もライフ４０００のこの世界では『神の警告』の完全上位互換カードであり、実に有用。

モンスターカードには本当にロクなものが無かった。これで手に入ったカードに種族の統一性や属性、同じシリーズであれば別種族やシリーズのデッキを組む事が出来るのだが、てんでバラバラ。

『ドラグ二ティ』がいたかと思えば、『ライトロード』があり、他にも『Ｅ－ＨＥＲＯ』やら『暗黒界』やら強力ではあるが単品であっても何の意味も無いカード達であったので、トレードの種や売って金銭になってもらった。

で、手に入ったカードの中で恐らく最も高価であり、かつ有用過ぎて使用を躊躇う問題児が一枚。名を『命削りの宝札』というカードである。アニメオリジナルカードであり、その効果は「手札を五枚になるようドローし、五ターン後全ての手札を墓地に送る」という凶悪なもの。

五ターン後云々の部分がまるでデメリットになっていない、最大五枚ドロー出来るカード。一枚でアド四枚取れるカードなど、前世なら一瞬で禁止行き（そもそも作られなかったし）になるだろう。封印確定だな。うん。あるかどうか分からないが、魂や命を賭けたデュエルをする時にこっそりデッキに入れる事にしよう。

ちなみに、普段やかましいエクサが静かなのは、最近デュエルによく出る事が出来ているためである。正直、俺は余り彼とはデ

ュエルしたくないのだが……

「コウヤ、俺とデュエルしようぜ」

「遊馬……朝やったばかりだろうに」

そう、遊戯王ＺＥＸＡＬにおける主人公、九十九遊馬である。凌牙の髪型で慣れてはいたものの、遊馬の髪型はやはり突飛であるように感じてしまう。遊馬は俺の一つ下。一年前に彼が入学してから幾度と無くデュエルを挑まれているのだ。

デュエルを挑まれる理由は、やはり幾つもの大会で優勝しているからだろう。実際、道を歩いていると見知らぬ子供からデュエルを挑まれる事がある。小学生とはいえ、それなりに顔が売れてしまっているようである。

そしてこの九十九遊馬はデュエルチャンピオンを目指していると公言している通り、強い相手を見かけるとデュエルを挑み、そして負ける。弱いという次元ですら無く、そもそもルールを理解しているのか怪しい部分も多い。

～最弱時（現在）の遊馬伝説～

攻撃力の劣るモンスターで攻撃（リクルーター等ではない）

伏せたカード名を宣言

トラップを手札から発動しようとする（カード効果によるものではない）

自分のモンスターの効果を把握していない

ドローを忘れる

等、負ける気がしない。ちなみに指摘した事も一度や二度では無いのだが、次の時には忘れている。一度本気で講義じみたものをしてみたのだが、机についた瞬間眠り始めるという有様。原作よりましになるかと思ったのだが、これはアストラルさんが来るまで変わらないかもしれない。

こう言うとあれだが、カットビングという考え方が足をひっぱているような気がしないでも無い。何かに挑戦するという思いは悪いものでは無いのだろうが、特に頭を使う様な事柄である場合、その考えは思考放棄にしかならない。

まあ、デュエルする回数が多い分やってるうちに慣れるかもしれないけれど、今は出す必要もない場面でエクサを出すような事をやっても負けようがない程だ。

デッキ構成がマズイという事もあるのだが、これは仕方ない。カード自体が手に入り辛いのだから、ある程度の構成の拙さには目を瞑るべきだろう。ただ、デッキ内容が原作開始時、つまり五年後と大差がないというのはどうなのだろう。五年間何の進歩もしないというのだろうか。

「ともかく、今日は勘弁してくれ。行きたい所があるんだよ」

「ええ～、一回位良いじゃんかよ」

まあ、カップラーメンが出来るまでの時間で勝負がつくだろ

うが、勝ちの決まったデュエルをしたくない。何度やっても上達の気配が見えないし。

「よし、決めた。お前が鉄夫君を倒せるようになるまで俺はお前とデュエルはしない」

「そんなぁ。俺、鉄夫に一回も勝ててねぇのに」

俺は一応鉄夫よりも強いわけなんだが。ともあれ、これで少しでも上達してくれれば御の字だろう。何せ、このままだとアストラルが消滅しかねないし。

原作通り凌牙がアンティでデッキを取り上げたり、遊馬の皇の鍵を折るような真似をするとは思えないが、Ｎｏ．カードに取り憑かれる可能性は十分にあり得るだろう。そしてそれに気付いたアストラル・遊馬が原作よりも強くなった凌牙に挑む⇒返り討ち⇒アストラル消滅⇒ＺＥＸＡＬ終了となりかねない。

他のＮｏ．所持者とは関わり合いが無いから良いようなものの、凌牙は間違い無く強くなっている。正直、アストラルの手助けありでもあの壁を超えられるとは思い難い。

ーーあれ、そう考えると強化は必須か？

アストラルが現れるまでに負けるという可能性もあるが、それに賭けるのはあまりにも分が悪い。

「じゃあ遊馬、俺と一緒にカードショップに行かないか？」

「つっても、俺、金持ってないし」

「そこの店長は良い人でな。暇ならデュエルを教えてくれるし、腕前も確かだ。俺もお世話になったし、今もなってる」

カードを買いに行くわけじゃないんだよと言って遊馬を諭す。俺は礼儀も兼ねて一パックくらい買うだろうけれど、店長はそんな細かい事を気にする人ではないし。

「そこに行ったら俺もコウヤみたく強くなれるのか！？」

目をキラキラさせて言う遊馬。俺には前世というインチキがあるから後ろめたい気持ちがあるが、こればかりはどうこうなるものではない。俺は苦笑いしつつ、言う。

「それはお前次第。行ってみるか？」

「応、行くぜ。カットビングだ、俺！」

気合に満ち溢れているな全く。遊馬の凄い所はこバイタリティだろう。歴代主人公と比べると技術面ではるかに劣る遊馬だが、メンタル面では彼らを凌駕するだろう。こういう所は素直に尊敬出来る。

「遊馬～」

廊下の端から小走りで近付いて来るのは緑色の髪をした少女とガタイの良い少年。

「おや、小鳥ちゃんと鉄夫君か」

「コウヤさん、遊馬がまた迷惑かけませんでしたか？」

と、声をかけて来る鉄夫君。遊馬と違い敬語を使って来るのは年上への気遣いか、様々な大会で結果を残している事への尊敬か。大方後者なのだろうけれど。ちなみに鉄夫君とも何度かデュエルしており、成る程これでは遊馬では勝てまいと思うくらいには強い。

「いや、構わないよ。丁度良かった。君たちも着いて来るかな？」

これからカードショップに行く事を話すと、一緒に行きたいとの事。小鳥ちゃんは遊馬と話していたが、遊馬が来るからには間違い無く着いて来るだろう。

ーーそして場面は移り、カードショップ。

「店長、来ましたよ」

「おう、コウヤか。待っていたぞ。後ろのはダチか？」

俺の後ろを顎で指す店長。三人ともクマのような店長に驚いたのか、固まっていた。まあ、無理もないと思う。この人二メートル以上背の丈があるからね。

「ええ。少しコイツを店長に鍛えてもらおうかと思って」

遊馬の頭を軽く叩いて言う。遊馬は何すんだよと言っているが、俺は軽く笑って誤魔化す。

「へえ、初心者か？」

「ええ、初心者です」

「俺は初心者じゃねぇ～」

遊馬が騒いでいるが、とりあえず自分のデッキにあるカードの効果を把握出来るようになってから言うべきだと思う。

「それで、連絡が来たという話でしたが」

「ああ。ほらよ」

店長から手渡される一通の封筒。俺はそれに暫く視線を落としてからゆっくりと息を吐き、店長に視線を戻す。

「ありがとうございます。本当に世話になりっぱなしで」

「だからガキがそんなこと気にすんなって言ってるだろうが」

手でしっし、と追い払うような動作をする店長。これはこの人が照れ隠しによくする動作だ。俺は軽く頭を下げ、遊馬達に向き直ると店長に扱いてもらえよ、と言い残してＡＲヴィジョンを使わないデュエルスペースに向かい、使われていない椅子に腰掛けた。

遊馬達を店長に投げた形になるのだが、この手紙は何よりも重要なものになり得るのだ。店長には一人で来た時に頭を下げることにしようと思う。また気にすんなと言われそうだが、それはそれである。

さて、俺がこの世界に生まれ変わってから早九年。この九年間デッキを作りデュエルをするという生活をして来たわけだが、もう一つ俺が意識して行って来たことがある。もっとも、それはここ二年間の話なのだが。それは、一つの疑問。

ーーこの世界に居る異邦人は俺一人であろうか？

ということである。それをここ二年間、幾つもの大会に出て目立つことで確かめてきたのだ。大会に出る時、背中にでかでかと5D's と描かれた上着を着てみたり、優勝した時のスピーチで思わせぶりなことを言ってみたり。そしてその度、自分が子の店によく来ていることを喧伝していたのだ。もっとも、これは単に恩返しを兼ねた店の宣伝でもあったのだが。

大きい大会は地方TVに放映されることもある。この世界に異邦人が居れば、接触してきてくれるかもしれないと思っていた。最悪、凌牙が嵌められることになる大会で優勝する事も考えている。全国大会は大々的にメディアに流れるし、原作を知っている人なら違和感を感じるだろうから。

その成果がこの手紙である。今日の昼時、店長からDパットに「女の子からお前に伝言だ『GXを知ってる』だとよ。どういう意味だ？　ガンダムか？」とメールが来た時には飛び上がりそうな程驚いたものだった。

「その娘は？」とすぐにメールを返すと、「手紙を渡して帰った」との事なので、一も二もなくやって来たわけだ。その途中で遊馬にデュエルを挑まれたため、ぞんざいに扱ってしまった訳だ。

俺は恐る恐る手紙の封をやぶり、ゆっくりと手紙を取り出し

た。

ー明日の朝九時、この店の前で。

P．S．　羽蛾？

おい、P．S．の部分必要か。絶対巫山戯て入れただろう、これ。顔は知らないが、この一行を付け加える時にニヤニヤ笑っているのが想像出来るぞ。まあ、これで異邦人である事は確定ではあるのだが。

というか、虫使いは羽蛾かよ。漫画版５D'ｓに出て来るセクトだって使っていただろうに。いや、羽蛾のイメージが強いのは理解できるけれども。

『この方がコウヤ殿の同郷なのか？』

「ほぼ確定かな。本当にそうならありがたいけど」

前世に対する思いはもう殆ど残っていない。両親は成人する前に亡くなっていたし、特待生として入った大学の勉強とバイトに追われる日々を送っていた。デュエルをする友人はいたが、週に一度時間が取れるか取れないかだった。有意義と言えば有意義ではあったけれど、疲れが取れない毎日。生まれ変わった原因は分からなかったが、過労死という可能性が捨てきれない辺りゾッとしない。

しかし、だ。仲の良かった昔の友人に会うような気分だろうか。俺はその少女に会う事をひどく楽しみにしている自分に気が付く。前世に未練は無いと思うのだがと首を傾げ、どうでもいいかと首を軽く揉んだ。

「伏せたカード名を口に出すんじゃねぇ」とか、「効果を良く見ろ」とか「カットビングだ」とか聞こえる声をＢＧＭに、俺は手紙を鞄にしまった。

ーーさて、明日が少し楽しみになって来たな。

第四話（後書き）

主人公以外の異邦人は今回登場を示唆した一人だけです。一人くらい主人公が全てを相談出来る相手がいても良いかな、と。

一応ヒロイン候補になるのかな。

第五話（前書き）

シャークさんの名字が神代で天道と対になる事に今更ながら気付きました。

カブトは好きです。というかライダー全般ですが。

第五話

さて翌日、都合の良い事に祝日だ。だからこそ今日を指定したのだろうけど。どうするかね、期待に応えて伊達眼鏡でも掛けてヒョッヒョッヒョとか言いながら出て行こうか？まあ、伊達眼鏡なんて持っていないし、髪型も髪の色もまるで違うから羽蛾には似せようにも似せられないけれど。

ちなみに俺の髪の色は普通に黒。髪型はオールバックに近い感じ。子供がするには妙な髪型なのだろうが、ここは遊戯王の世界。この髪型など地味も良い所である。この世界では平気で髪に二色三色のメッシュが入っている上、髪型も針金でも入れているのかという突飛なものが多い。

しかし、この世界で地味に気になっているのだが、髪型って遺伝するのだろうか？　いや、常識的に考えるとするわけ無いのだが、遊戯と双六・蟹と蟹父の例を見ていると疑いたくなるのも無理からぬ事だと思う。ちなみに俺の父は商社マンで海外を転々としており、滅多に会う事は無いのだが、髪型はオールバックだーーあれ？

しているのかね、遺伝。こう、無意識に近いレベルの何かで。でも遊馬の親や姉にはそんな事はなかったはず。どうなんだろうな。

そんなどうでもいい事を考えつつ、ゆったりとした歩調で店へと向かう。家から徒歩二、三分もかからない場所にあるのだから急ぐ必要を全く感じない。待ち合わせの五分前には余裕でつけるだろう。

『どのような者なのであろうな？』

「年相応でないのは確かだろうね」

俺自身がそうであるように。初めのうちは年相応に振る舞おうかとも思ったのだが、無理だった。身体や環境に引っ張られている部分こそあれ、元々自分の事は自分でどうにかしていた年齢な訳で。何もかにもやってもらうというのは精神衛生上よろしくない。

正直、働けることなら働きたいくらいなのだ。何もしていない自分を自覚するとむず痒くなってくる。それを紛らわせる為に勉強してみれば神童呼ばわり。ただのチートだというのにそれを褒められるのはやはりむず痒くなる。

前世で暇が少なかったせいか、何もせずにいるのが不安になってくるのだ。ワーカーホリックと言われればそれまでなのだけれど。勉強して心が落ち着くというのは末期かもしれない。

この世界でデュエルが社会的に大きな地位を占めている事は分かっているのだが、いかんせん前世では趣味であり、息抜きだったのだ。こればかりをやっているというのは遊びほうけているようで、罪悪感が込み上げてくる。

俺は割と極端なのだろうけれど、これから会う人も多かれ少なかれそういう部分はあるだろう。だからこそ、子供のように振る舞うのは酷く難しい。

「さて、あの娘がそうかな？」

店の前に佇む絹糸のような黒髪を後ろで一つに纏めた少女。

ぱっと見た印象は黒髪のエリアルといった感じだろうか。正直、突飛な外見をしていなくて助かったと思う。三色メッシュとか、反応に困る自身があるからな。

「あー、君が手紙の人で良いのかな？」

「……そう」

これで違っていたら中々恥ずかしかったのだが、合っていて良かった。Dパットを持っている辺り、やはりと言うべきか彼女もデュエリストであるらしい。

「待たせてしまって申し訳ない。俺は天道甲谷。この世界での年齢は九になる」

「……日下部（くさかべ）　絵理（えり）。同い年」

落ち着いた声音。透明感のあるその声は耳に心地良く響く。しかし、天道に日下部と聞くとあれが思い出されるな。俺は別段天の道を行けるような男では無いが。

「……カブト？」

おおう、先に言われた。まあ、知っていればそう思うのも無理からぬことだとは思う。よくよく考えれば凌牙の名字も神代だしな。この世界には仮面ライダーシリーズは存在していないから、異邦人なのはこれで確定だろう。ちなみに、この世界で仮面ライダーポジションにある番組に『マスクドゼクター』シリーズというのがあったりする。

「良い反応をありがとう。立ち話もなんだから、何処か落ち着ける所に行こうか」

「……分かった」

この辺りは住宅街であまり店は無いのだが、少し歩くと駅がある。駅前にはチェーン店の類が結構な数あるから、そのいずれかに入れば良いだろう。

歩きながらの会話はあまり無かった。彼女から話し掛けて来ることは無かったし、俺も前世関連の話は落ち着いて話したかったから。当たり障りの無いことを口に出していただけだ。彼女は口数の少ないタイプなのだろうと思う。ただ、前世ありの割には少し幼い印象を受けた。

「それ、精霊？」

駅前の賑やかな通りに入った所で彼女がエクサを指してそう聞いてきた。正直、初対面の時に聞かれなかったから見えていないものだと思っていたのだが。

『おお、私が見えるのか』

「ああ。『甲虫装機　エクサビートル』の精霊だ。喧しい奴だけど、悪い奴じゃないよ」

「そう」

エクサが興奮して小躍りしているが、金の鎧が小躍りするのは実にシュールだ。もっとも、家ではテレビを見て興奮していたり

するので俺にとっては見慣れたものだが。

ーー今更だけど俗っぽいよな、コイツ。

ＧＸのネオスや５Ｄ' ｓのレグルス辺りはもっと超然としていたものだが。まあ、ＢＭＧも割と俗っぽい性格だったから、この辺りは人間と同じ個性なのだろう。

全国チェーンの喫茶店に入り、コーヒーとカフェオレを注文して奥まった席に着く。ちなみに支払いは俺がした。ここは様式美というかマナーというか。

「さて、確認なんだけど、君には前世があるということで良いんだね？」

「……うん」

まず間違いないと思うが、一応確認を取る。この大前提無しに話は出来ないから。俺はコーヒーを一口すすり、続けた。

「そうか……じゃあ、元の世界に戻りたいかい？」

「戻りたくない」

即答だった。戻りたいと言われれば最大限協力しようと思っていたのだが。誰も彼も俺のように未練が無い訳ではないだろうし。しかし、戻りたいと言った瞬間表情が硬くなり、瞳に陰がさしたような気がする。前世で何かあったのかもしれないな。俺の勘違いかもしれないけれど。

「……あなたは？」

「俺もこの世界で生きていきたいと思ってるよ。前世への未練も殆ど無くなったからね」

そう言ってコーヒーを流し込む。前世よりも苦く感じるのは子供故にだろう。こうやって時々思い出す位で俺には丁度良い。

その後も前世について少し話をしていたのだが、どうやら彼女は前世で十三歳だったらしい。ついでに、自信が死んだ記憶もあるとのこと。

なるほど幼く感じて当然か、と思う。単純計算で彼女の精神年齢は二十二になる訳だが、精神性というのは立場や環境で育まれるものだ。十三歳までで得られる経験など知れているし、自身の行動に責任を背負う事も無い。良い所精神年齢は十三～十五、六といった所か。

しかし、死んだ記憶があるという事は俺も死んだのだろう。記憶が無い辺り過労死確定だろうか。笑えない事この上ないな。

「アラサー？」

「グフッ」

彼女から放たれた言葉の刃が胸を鋭く抉る。実際、精神年齢は二十九になる訳で。立派なアラサーだろう。俺の場合、立場云々で言い訳も効きづらい。二十歳ともなれば性格形成は大凡終えている訳で。

良いんだよ。今は九歳だし。行動諸々は九歳のそれではないけれど、社会的には。話していて分かったのだが、彼女は物静かなだけでなく中々愉快な性格をしているらしい。

「全く、楽しいな。何でも話せるというのは本当にありがたいよ」

「……私も」

前世の話だけではない。デュエルモンスターズではなく遊戯王の話が出来るというのは中々奇妙で愉快な体験だ。自分本来の姿で話せるというのも大きい。常とて特別自分を偽っている訳では無いのだが、隠している部分も多くある。それ無しに話せるのだから、本当にありがたい。

「コウヤは何で昆虫デッキ？」

「人気が無いから組みやすいかな、と。まあ、俺が好きだからって部分も当然あるけどね」

彼女にはコウヤと呼んでもらう事にした。実際、俺の事を天道と呼ぶ人は殆どいないしね。天道と呼ばれて、一瞬反応が遅れる程度には呼ばれ慣れていない。

「そっちは？」

「確かめて、みる？」

「是非」

デュエルディスクにデッキをセットした彼女が言う。丁度お互いに

注文した物を飲み終わった所だし、良い頃合いだろう。俺達は席を立ち、店を出た。

所変わってカードショップ内のデュエルスペース。店長に「彼女連れか？」「お前にも春が来たか」等とからかわれつつ、デュエルスペースを使わせてもらう事に。時間は十一時を回った所で、このカードショップの開店時刻は十一時。今のところ俺達の他に客は居ない。

「さて、始めようか」

「……うん」

お互いデュエルディスクは展開済み。Dゲイザーも装着している。彼女のデュエルディスクは黒に近い青色。Dゲイザーの色は青だ。

ーーARビジョン、リンク完了。

「デュエル」

「……デュエル」

コウヤ　LP4000

エリ　LP4000

五枚の手札を引きDパットを見ると、どうやら俺が先攻のようだ。デュエルディスクには先攻・後攻をランダムで決める機能がついているのだが、何故かあまり使われない。言った者勝ち的に先攻・後攻を決める事が圧倒的に多いのだ。今回は珍しくその機能を使った訳だが。

ーー手札はかなり良い。

今回使っているデッキは変則的な昆虫族デッキで、安定性に欠くのだが、どうやら上手く回ってくれそうである。

「俺はモンスターをセット。カードを一枚伏せ、ターンエンド」

セットしたのは安定の過労死代表、共鳴虫さん。俺のエースカードはエクサビートルになるのだろうが、フェイバリットはコイツかもしれない。今日もお世話になります。

「私のターン、ドロー。私は手札から『サイバー・ドラゴン・ツヴァイ』を召喚」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ　星４　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００

「なっ！？」

ーーサイバー流だと！？

この世界にもサイバー流は存在するが、組み辛かろうと早々に組むのを諦めた。格好の良さとその強さから人気の高いカテゴリの一つ。まさかこんな形で見る事になろうとは。しかし、よく組め

たものだ。

「更にサイバー・ドラゴン・ツヴァイの効果を使用。手札の魔法カードを見せる事でエンドフェイズまでこのモンスターを『サイバー・ドラゴン』として扱う」

見せられたカードは『融合』の魔法カード。嫌な予感しかしない。この効果を使う場合あり得るのは『エヴォリューション・バースト』を使うか、融合素材として使うかである。そして見せられたカードは融合。十中八九ーー

「……私は手札の『サイバー・ドラゴン』二体と場の『サイバー・ドラゴン・ツヴァイ』を融合。来て、『サイバー・エンド・ドラゴン』」

サイバー・エンド・ドラゴン　星１０　ＡＴＫ／４０００　ＤＥＦ／２８００

現れる三つ首の機械龍。ＧＸ版青眼の究極龍とはよく言ったものだ。その圧力は凄まじい。巨大なその姿は見るものに畏怖を与え、戦意を間違いなく削ぎ落とす事だろう。前世ではサイバー・ツイン・ドラゴンの方が良く目にしたが、この効果モンスターとて実に恐ろしい。

サイバー流のデッキなのだから入っていてもおかしくは無いのだが、このカードは世界に十数枚程度しかなく、サイバー流の中でも特に優れたデュエリストしか持っていない筈なのだが。

というか、一ターン目からコイツを召喚するとか。どこのカイザーだと言いたい。しかし、サイバー・ツインを呼ばなかったの

は何故だろうか。伏せたカードがリクルーターである事を読まれたかな。まあ、出してこなかったのだからそれで良いとしよう。

「……手札から速攻魔法『リミッター解除』を発動」

「させるか！チェーンしてリバースカードオープン。『ＤＮＡ改造手術』俺は昆虫族を指定させてもらう」

リミッター解除は自分フィールド上に存在する全ての機械族の攻撃力を倍にするカード。ＤＮＡ改造手術は種族を宣言し、このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に表側表示で存在するモンスターは宣言された種族になる効果を持つ。

チェーンを組んで先に効果処理が行われるため、リミッター解除の効果はサイバー・エンドに適応されない。よって攻撃力は４０００のままである。サイバー・エンドは貫通効果持ち。リミッター解除の効果が通っていれば呆気なくワンキルされていた。エリ、恐ろしい娘。

「……羽蛾カード」

引っ張るなあ。確かにそうなんだけれども。ただ、虫除けバリアーは入っていないのであのコンボは出来ない。エリの声は若干不満気だ。表情が分かりづらい彼女だが、デュエルでは少し分かりやすくなる。

「……サイバー・エンド・ドラゴンでセットモンスターを攻撃。エターナル・エヴォリューション・バースト」

三つの首それぞれに白色のエネルギーが凝縮され、限界まで

押し留められた破壊の力が指向性を持って放たれる。セットされていた共鳴虫を何の抵抗も無く破壊し、衰えぬエネルギーの奔流が俺を直撃する。

「くっ……」

コウヤ　ＬＰ１３００

「だが、共鳴虫の効果を発動。デッキより共鳴虫を守備表示で召喚する」

共鳴虫　星３　ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／１３００

一回のデュエルで最低二回は出てくる共鳴虫先生。本当にお疲れ様です。

「……私はカードを一枚伏せてターンを終了」

これで彼女の手札はゼロ。フィールドこそ整っているが、このターンで決められなかったことは痛いだろう。

「俺のターン、ドロー」

引いたカードはーーサイクロン。俺は小さく笑みを浮かべる。

ーーこのターンで、終わりだ。

第五話（後書き）

まさかのサイバー流。

実際には滅多に見ませんよね、サイバー・エンド。ツインの方が優秀なので仕方ないのですが。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7563x/

虫使いのZEXAL生活

2011年10月30日02時11分発行